

デフォルト農業な地域デザイン

～耕作放棄地の利活用～

地域名：矢板市

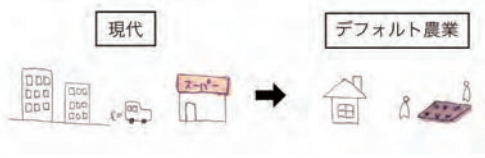
18 班 コミュニティデザイン学科 小野亮太 石川真帆
 建築都市デザイン学科 小林みなみ 田部井亜美
 社会基盤デザイン学科 徳留雄太

パートナー名：矢板市地域おこし協力隊 高橋 潔

背景

デフォルト農業とは？

⇒農業離れの進んだ現代で、普通に当たり前に生活の一部として農業を身近に感じることができるようにする仕組み



矢板市の農業における課題

⇒高齢化や若者の流出により農家の後継者が不足が深刻化している。
 また、山間部や狭小部には機械の導入ができず、作業効率が悪いため、耕作放棄地が多くあることが課題である。



目的

◇敷地調査

耕作放棄地の実態を知ることが目的である。耕作放棄地を利活用する上でその実態を詳細に知ることは必要不可欠である。

◇意識調査

矢板市民の「交流」に対する意識や農業への関心について知ることが目的である。増え続ける耕作放棄地の新たな利用方法として、農業への関心を高められる場所、そして地域内の交流が少ないという現代の課題を改善する地域コミュニティの場所が必要とされるのではないかと考え、どのような需要があるかを調査した。

方法

◇敷地調査

①現地調査

⇒現地に足を運び、耕作放棄地の広さや数などの現状を確認する。

②マッピング

⇒駅から対象敷地にかけてのアクセスのしやすさ、周辺施設の種類のわかりやすく示すために主要な道路やお店のマッピングを行う。

◇意識調査

⇒道の駅やいたの利用者男女 50 人に対してアンケート調査を行う。パネルの中から自分の考えに近い選択肢にシールを貼ってもらう。

分析結果

◇敷地調査

⇒アクセスしやすい。国道 4 号沿い + 駅近



◇意識調査

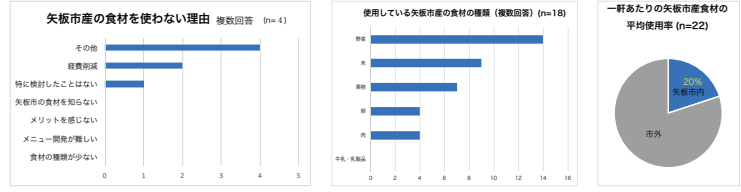
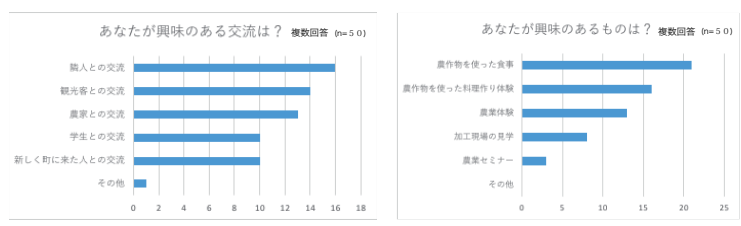
●「交流」に対し肯定的な意見が多く、いろいろな人との交流に関心を寄せている。

⇒地域コミュニティの場に需要がある

●「農作物を使った食事」への関心が最も高かった。これは農業に関わりのない人も気軽に農業に携われる場所だからだと考えられる。

●対象敷地周辺の飲食店では金額ベースで 2 割程度しか地元の食材が使用されていなく、地元産食材に接する機会が少ない上、地産地消への関心も低いと言える。

⇒矢板市産の農作物を使った食事、料理体験、農業体験といった農業を身近に感じられるような空間を提供できる包括的な場に需要がある



提案

分析結果より...

⇒「農作物を使った食事ができ、料理作り体験や農業体験を提供できる包括的な場」の需要があることがわかった。

提案

⇒矢板市内の対象敷地内に「レストラン」「共用キッチン」「畑」の 3 つのエリアを持つ食と農業の複合施設を提案する。

●「レストラン」…矢板市産の食材を口にすることで、地元の農作物に興味を持ってもらう。また食べるだけでなく、今まで関わりを持つことが少なかった地域の人どうしでの交流がしやすいサロンのような役割も担う。

●「共用キッチン」…レストランに販売所を併設し、興味を持った農作物を購入し共用キッチンで調理できる料理体験を行うことで、地元食材の消費量増加を促す。

●「畑」…レストランで使用する農作物の一部を畑で育てる。また、施設を訪れる人が気軽に農業体験ができる場所にする。

↓

3つのエリアの特性を活かし複合することで
 「自然と農業に関わりを持てる場」「地域住民の交流の場」を作る

